鉄道の「歴史」と「未来」の邂逅(めぐりあい)が、ここから。“鉄道の父”眠る大崎の地で。

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと 大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『大崎今昔物語』。
その第十五話は、日本の鉄道生みの親が眠る聖地と、その下を通る 予定の未来の鉄道リニアモーターカーとの“めぐり逢い”の物語
大崎駅から徒歩約15分の名跡東海寺大山墓地に、「歴史」と「未来」のクロスオーバーストーリーがありました。

東海寺大山墓地の真下を通ることが決まったリニア中央新幹線。東京から甲府、名古屋、奈良を経由して大阪まで、約440キロの距離を超伝導リニアシステムによってわずか1時間で結ぶ“未来の鉄道”として注目を集めています。

新橋・横浜間に日本で最初の鉄道を開通させ、開国間もない日本の鉄道創業に尽力した〝鉄道の父〟井上勝。その功績を称えるかのように、偉人眠る大山墓地の地下深くに、奇しくもリニア中央新幹線の開通が計画されました。そこで、大崎を舞台にした井上勝と鉄道と、大山墓地を結ぶ縁（えにし）の物語を訪ねます。

萩博物館蔵

萩博物館蔵

新橋・横浜間の鉄道開通を実現させた〝鉄道の父〟井上勝

日本の鉄道の歴史は、明治5年に実現した新橋・横浜間の鉄道開通に始まります。〝汽笛いっせい、新橋を…〟の歌でも知られた日本の歴史上の一大エポックは、〝鉄道の父〟井上勝によってもたらされたといっても過言ではありません。井上勝は、天保14年（1843）に萩藩士井上勝行の三男として萩城下の土原に生まれました。兵学・砲術・英語を学んだ後、海軍術修得のため幕府の渡航禁止令を破り伊藤博文や井上馨らと密航留学により英国へ渡り、ロンドン大学で鉱山学や鉄道の実業を研究。明治元年に帰国してその4年後には、明治政府の鉄道頭として日本初の鉄道開設を成し遂げています。その後も鉄道庁長官などの要職を歴任し、日本の近代的交通網整備に多大な貢献を果たしたのでした。

鉄道一筋に生きた後、鉄道の発展を見守るかの様に東海寺大山墓地に永眠。

新橋・横浜間の初の鉄道開通の後、明治22年には日本の大道脈、新橋・神戸間の東海道線を全通させ、さらに明治29年には鉄道機材の国産化を目指し汽車製造合資会社を設立するなど、鉄道一筋に歩んだ井上勝は、やがてロンドンにて客死、68年の生涯を閉じています。

井上勝のイギリスへの密航留学から始まった日本の鉄道発展

井上勝は、欧米列強に対する密かな人材育成策として萩藩が送り込んだ「長州ファイブ（5傑）」の一人でした。イギリスで西洋の近代文明を目の当たりにした井上勝は、日本を西洋諸国に劣らぬ強国にと願い、多くのものを学び取った後、日本の鉄道発展に向けその知識と技術を発揮したのでした。

その後、井上勝のなきがらは、かつて小誌でも取り上げた沢庵和尚永眠の地としても知られる東海寺大山墓地に葬られたのですが、その地は奇しくも、井上勝が一生を捧げた鉄道の線路横。あたかも鉄道の発展を見守るかの様に佇む井上勝の墓石のすぐそばを新幹線や東海道線などの列車が通り抜けていきます。生前、〝死んでも魂はこの地にありて鉄道の看守とならん〟と述べていた井上勝。鉄道との縁（えにし）は切れることなく、さらに未来へと続いていくこととなります。

注目の新鉄道システム、リニアモーターカー（リニア中央新幹線）が井上勝永眠の地の下を

次世代の新交通システムとして期待を集めるリニアモーターカーの軌道が、つい最近大山墓地の真下に当たる場所を通ることが整備計画により決定（予定）されました。東京から大阪まで約440kmを時速500kmで走行する〝未来の鉄道〟の開通を、鉄道の父、井上勝はこの地にあってどんな思いで見つめるのでしょうか。苦労の末に達成した明治の時代の鉄道整備。その歴史の礎の上に颯爽と走り抜ける超新鉄道の新たな時代。「歴史」と「未来」の邂逅がいま、大崎で始まろうとしています。

大崎駅から居木橋をわたり、目黒川沿いに歩いてほど近くにある名跡、東海寺大山墓地。井上勝の墓はその一角、新幹線が横を通る「鉄道記念物」の碑と共にあります。草創期の日本の鉄道発展に生涯を捧げた井上勝。その道程はリニア新幹線の疾走する未来の軌道へと繋がっていきます。

帆船に乗り、命がけで密航留学した5人のサムライ「長州ファイブ」のロンドンでの記念写真。中央に井上勝を挟んで、右後に伊藤博文、右前に山尾庸三（後の東大工学部創設者）、左前に井上馨（初代外相）、さらに左後に遠藤謹助（後の造幣局長）と、近代日本を牽引した蒼々たるメンバーが並びます。（萩博物館蔵）

日本初の鉄道開発を達成した後も、井上勝は外国の力に頼らず日本人が自力でつくる鉄道を目指して技術者養成に力を注ぎます。写真は、井上勝の努力の成果となった明治13年に日本人が最初に作った山岳トンネル「逢坂山トンネル」

井上勝によって明治5年に開通した新橋・横浜間のわが国初の鉄道は、文明開化の象徴として当時の人々に大きな注目と期待を持って迎えられました。西洋から輸入された蒸気機関車の偉容や西洋建築の新橋駅舎の景観を伝える2枚の錦絵からも、西洋文明に初めて接した人々の驚きが伝わってくるかのようです。（右・「東京各大区之内 芝金杉橋遠景」／左・「同、新ばしステイーション）

■写真出典：萩博物館（所蔵写真）、他 ／ 資料提供：萩博物館